

第 7 章 果樹に関する研究
(昭和 30 年 7 月まで)
第 1 節 研究の変遷
1.明治時代

本県の果樹生産は,明治中期には取立てるべきものはなく,当時の農会報(明治 35 年)によれば「近時,板野,勝浦,那賀,阿波郡などにおいてミカン,ナ シ,モモ等の栽培やや盛んなりといえども,未だ県内の需要を充たすに足らず」とあり,将来増反し栽培技術を改良すれば県内需要を充たすことはもちろん,阪 神への輸出の途を講ずることによりその利益が大きくなるであろうと記している。当時は,果樹園としての形態を整えていたのは,ミカンとナシ位のもので大部 分は放任栽培であったと考えられる。これより先,明治 16 年度の果実生産高順位によれば,第 1 位ミカン類,第 2 位カキ,第 3 位ウメ,次いでヤマモモ,ビワ であり,ミカン類の中ではコウジが中心で収穫高の 90%を占め小果時代であった。果樹の栽培が盛んになったのは,まずミカンであるが,県下の各郡農会が中 心になって苗木の無償配布を行い指導奨励につとめた。ミカンの種類も温州ミカンの有利性が確認されてから勝浦郡を中心にして那賀郡,海部郡,次いで名東・ 名西郡へと波及し,明治 40 年頃から大巾に栽培面積が拡大したのである。農事試験場においては,「果樹栽培の葉・明治 44 年」「柑橘剪定法・明治 44 年」を発刊し適切な栽培指導を行っている。ナシは板野郡大津村を中心に明治 35 年頃にはかなりの面積に達し,明治末には大阪,神戸市場へ出荷されるようになった。モモは明治 30 年頃より天津水蜜桃,上海水蜜桃が阿波郡,板野郡で栽培が開始されている。その他カキ,ビワ,ヤマモモ,クリ,ブドウ,ウメなどが放任 的に栽培されていたが,接木技術が普及されるにともない優良品種への更新が各地で進んだ。

明治 36 年徳島県農事試験場の設立と同時に農商務省農事試験場四国支場より継続した果樹は,ミカン,ナシ,リンゴ,モモ,カキ,イチジク,ビワ等であっ たが,これらを引続いて見本樹として栽培した。一方では,苗木の養成を行い明治 42 年 185 本,43 年 90 本を配布している。また明治 42～44 年にかけて は,製果試験と題して乾柿,ミカンジャム,ヤマモモジャム,イチゴジャムを試作している。病害虫関係ではミカンそうか病,ミカンカイガラムシ,カミキリ ムシ,ナシ赤星病,ナシ黒斑病の予防試験,苗木燻蒸試験などがある。

2.大正時代
大正時代は果樹園芸の隆盛期である。大正 2 年度の主要果樹はミカン,ネーブルオレンジ,ナツダイダイ,ビワ,ナシ,ブドウ,カキ,モモ,ウメなどである が産出額はミカン類が半ば近くを占め,勝浦郡を中心として阿波,那賀,名東の 4 郡が主産地であった。農事試験場においても果樹園芸指導の必要性が痛感され,主産地に最新の栽培技術(剪定,施肥,病害虫防除)を現地で実証展示する目的で委託試験地を設けている。大正 4～7 年には板野郡大山村にはビワ(品 種・茂木)を,大正 4～10 年には温州ミカンを勝浦郡棚野村(現勝浦町)に,さらに大正 11 年からは勝浦郡棚野村,同郡高銓村(現上勝町),同郡生比奈村 (現勝浦町),同郡多家良村(現徳島市)に,阿波郡大俣村(現市場町)には温州ミカンとネーブルを試作している。大正末期(大正 14～昭和元年)には温州 ミカンの肥料試験を勝浦郡横瀬町(現勝浦町)同郡生比奈村で大規模に実施している。またナシ(長十郎)の肥料試験を板野郡大津村(現鳴門市)で,カキとビ ワの有望品種(カキ:富有,蜂屋,ビワ:茂木)を三好郡三名村(現山城町)に導入し試作を始めた。さらに,果樹苗木育成園として 9 畝 3 歩を造成し,柿(西 條)苗を毎年 1,000 本内外を養成して郡市農会を通じて無償配布を行っている。大正 11 年には本県でイセリアカイガラムシが初発見されたが,その後数年 で県内のミカン地帯にまん延し大きな被害をもたらすようになった。このため大正 14 年から天敵ベダリアテントウムシの飼育を開始し,大正 15 年から昭和 15 年までの 15 年間広く県内各地に放飼したので,県内におけるイセリアカイガラムシの被害は認められなくなった。放飼頭数は合計 2 万 5100 頭に達した。

第 1 表 県下の果樹栽培状況 (大正 2)

	樹 数	収 穫 高	価 額	主 要 産 地 郡 名
ミ カ ン	306,454 本	680,396 貫	126,104 円	勝浦, 阿波, 那賀, 名東
ネーブル オレンジ	95,326	15,109	102,987	名東, 阿波, 那賀, 勝浦
夏ミカン	102,987	384,590	24,779	勝浦, 板野, 那賀, 名東
ビ ワ	35,184	166,286	30,339	阿波, 名西, 名東, 那賀
ナ シ	159,397	378,496	92,626	板野, 那賀, 阿波, 名東
ブドウ	5,180	7,823	2,380	板野, 那賀, 阿波, 那賀
カ キ	176,462	757,556	58,646	阿波, 勝浦, 那賀, 海部
モ モ	125,010	138,472	13,498	阿波, 板野, 那賀, 勝浦
ウ メ	95,160	5,148	22,651	那賀, 阿波, 勝浦, 海部

(大正 7 年徳島県農業基本調査より作成)

3.昭和時代(戦前)
昭和初期も大正期の果樹園芸の振興状態が継続されたが,昭和初期の経済恐慌に起因して養蚕業が衰退したため,桑園跡地を果樹園に造成し,不況を打開する ための経済更生計画を立てている。昭和 5 年春季には県下に果樹苗木を 11 万 7540 本(県内産 4 万 5500 余本)を栽植しているが,この頃の年間の開こん 面積は 120～130 町歩に達している。昭和 3 年には本場に果樹専任の職員を置き,果樹園を設置するとともにナシ 2 か所,柑橘 2 か所の委託試験地を新設 し,果樹栽培の改善と指導につとめ多大の成果を収めた。
昭和 6 年度から県の行政機関(農林課,経済更生課,農務課)から委託を受け農事試験場において果樹苗木の養成を行っている。その品種別配付数量はつぎのようである。
さらに昭和 14 年には同委託によりウメ苗木 6,000 本(鶯宿 5,353 本,林州 647 本)を養成し 1 本 8 円で 29 町村(138 名,12 町 3 反 5 畝分)を配布し果樹振興に大きく貢献した。
統計数値をみると昭和元年から 16 年までの間にミカン,ブドウは約 2 倍の伸びを示しているがナシ,カキは殆んど変化が認められない。

第 2 表 主要果樹の苗木配付数

年 度		昭 和 6 年	7 年	8 年	9 年
樹 種	品 種				
カ キ	富 有	5,170	5,185	1,795	3,446
	次 郎	490	606	1,540	2,116
	横 野	1,340	1,397	1,404	1,728
	西 條	1,140	—	—	—
	会津不身知	295	—	—	—
	平核無	—	455	448	640
ビ ワ	茂 木	2,051	1,418	720	2,498
ウ メ	鶯 宿	4,388	3,249	1,160	2,668
合 計		14,840	12,310	7,067	13,116

昭和 8 年には柑橘栽培地帯の要望に応じて柑橘栽培試験地を勝浦郡生比奈村に新設し,翌 9 年に苗木を定植し柑橘の栽培試験研究と当業者の指導に当たった。し かし昭和 16 年に始まった第 2 次大戦によって果樹は不急産物として圧迫を受け,抜根を強制され果樹農家は苦しい経営を経験した。
この時代の研究として,ミカンは新設なった生比奈柑橘栽培試験地で実施することとし,品種,施肥,根群調査が中心に行われている。昭和 9 年度からはナシ 品種の改良に着手し,500 余種の実生を育成して選抜の結果 8 系統の有望品種の作成に成功し,栽培価値について現地試験を行った。また昭和 14 年には両屋 根式ガラス室(24 坪)を建設しマスカットオブアレキサンドリヤ,18 本を同年 3 月 7 日に定植し見本栽培を開始した。

4.昭和時代(戦後)
戦後の食糧不足時代からようやく脱却し始めた頃(昭和 28 年)の果樹類の推定実収高の内ミカンが 62%を占め,主要産地も大正期と同様に勝浦,那賀,名 東,名西 4 郡で 91%の集中率を示している。終戦とともに果実の販売統制が解除され,自由経済のもとに果実の生産が高揚されるようになるが,食糧不足対応 が中心で労力も資材も不足していたので,衰弱した果樹を早急に復元するのは困難であった。しかし昭和 24 年(1949)頃から回復のきざしが見え始め,昭 和 27 年になると生産量も上昇傾向に向ってきた。この傾向をミカンの栽培面積でみると昭和 24 年 1,010㍓が 27 年 1,340ha,38 年には 1,750㍓と増反されミカンの全盛期を迎えたのである。その後上昇率はにぶったものの昭和 47 年まで栽培面積は増加している。これに呼応して農事試験場 においても昭和 24 年度に柑橘栽培試験地を生比奈柑橘試験地に改称職員 2 名が駐在し,ミカンに関する試験研究と指導に専念することとなった。また,落葉果 樹については,本場の果樹園が狭少のため,昭和 23 年度に板野郡大山村(現上板町)の既設果樹園を農事試験場大山果樹試験地として開設し,職員 5 名を置き 樹園地の回復に当らせる一方,主としてカキに関する試験研究に着手した。しかし当時の園地は荒廃の極に達しており,23～24 年の両年度は園地の開墾整備 に全員一丸となって努力したので,樹勢が強まり園地はみるみる回復した。その功により昭和 24 年 11 月には全職員(5 名)が勤務成績優秀で知事表彰を受賞 された。
昭和 9 年度に着手したナシの品種改良研究は 500 余種の中から 8 系統を選び栽培価値を継続試験の結果,有望と思われた 3 系統を昭和 28 年に「桜」「富 士」「真珠」と命名し発表した。ミカントゲコナジラミは,昭和 12 年勝浦郡横瀬村中山地区のミカン園で初発見以来県内に広がった。そこで昭和 25～26 年 高知県高岡郡からシルベストリコバチを導入してミカンの主産地に放飼した結果,数年でその効果があらわれた。また,ルビーロウムシは昭和 7 年勝浦町坂本で 初発見したがこの虫の天敵ルビーアカヤドリコバチを昭和 26 年から 28 年にかけて九州の福岡,長崎,大分,鹿児島県より導入し,農試において分離し雌・雄 比を同率にして県内各地に放飼した。その数約 4 万 3400 頭であり放飼後数年にしてルビーロウムシは姿を消しその駆除効果は高く評価された。

このように農業試験場創立以来続いてきた果樹研究の歴史も,昭和 30 年 7 月徳島県果樹試験場の新設に伴い施設・職員のすべてが移管されることとなった。本場においては創立以来 52 年余り,生比奈柑橘試験場では 22 年余,大山果樹試験地は 7 年余り,農事試験場の管轄下において果樹研究と指導に当たってきた が,ここにその幕を閉じることとなったのである。